

## 南風 こまち

冷房のきいたオフィスに正午を知らせるチャイムが鳴った。既にパソコンの電源を落とし、今か今かと昼休みを待っていた私はチャイムが鳴り終わる頃にはエレベーターで勢いよく地上に向かい始めていた。

エントランスを抜け、歩道を品川駅の方に向かって歩く。街角のショウウインドウをジャック・オー・ランタンが彩る季節になったのに、じりじりと日差しが強い。朝起きるのを渋って日焼け止めを塗らなかつた自分を恨む。太陽の光がキラキラとビルのガラスに乱反射する中、数分で品川駅の前に来た。

駅前の横断歩道を渡り、目当ての店が見えてくる。良かった、まだ店の外まで行列はできていない。給料日から日も浅い月初め、今日はちよつと奮発したランチだ。洋食屋『つばきグリル』。月一回の「褒美」。

入口横の立て看板には『ミニビール無料サービス 17時〜』とある。しくじつた、夜に来れば良かった。でももう口は洋食の気分だ。私の足は止まることなく、店内へと誘われていった。

自動ドアをくぐると、ワイシャツに縦じまのエプロンを巻いた店員が「いらっしやいませ」と出迎える。頑張って急ぎ足で来たけれど、既に一階の席はごつた返っていた。宣言が解除され、遠ざかつていた日常が少しずつ戻ってきている。

二階に案内されると、まだ人はまばらだった。絶妙に日差しの入らない窓際の席に案内された。初老の店員からゴブレット型のグラスと小さめのピッチャーに入られた氷水を出される。

私はそのまま店員を呼び止める。テーブルに置かれていたメニューを開く前から頼むものは決まっていた。「ハンブルグステーキとパンをお願いします」

「はい、ハンブルグステーキにパンですね、かしこまりました」

側頭部に白髪を残した店員は愛想よく伝票に注文を書き込み、階段を下りて行った。

料理が来るまでの間、スマホを開いてみる。どうしてもいい健康食品のダイレクトメール、最近興味を無くしつつあったアイドルグループの痴話騒動といったくだらない情報が目に飛び込んでくる。アホらしくなつてスマホをポケットにしまう。ぼんやりと窓の外を見ながら時間を潰そう。窓枠にも小さなジャック・オー・ランタンが笑っている。

昼間なのに、いや昼間だからだろうか、人通りや車通りは絶えることなく、奥の品川駅にはひっきりなしに電車が出入りするのが見える。長い宣言期間が終わつたせい……というより、感染者数が減つたせいだろう。人の出入りがやたら増えた。会社もテレワークから普通のオフィス業務に戻すことになったが、私は辞易した。毎朝着替えて化粧して満員電車の中で人間せんべいにされる日々が戻ってくるなんて。テレワークなら電波さえ届けば温泉宿からでも仕事できるのに、どうしてこうも不便な方向に逆戻りするんだろう。

さっきの店員さんが鍋敷きを持ってきてくれた。ナチュラルな色合いの木製の鍋敷きだけど、だいぶ使い込まれたみたいだ。度重なる高熱で表面が黒くこげている。この上に熱々の鉄板に載せられた料理が来ると思うと待ちきれない。感染対策としてプラスチックの衝立とかをテーブルに設置しているような店なら鉄板が触れて衝立を溶かしてしまう心配をしないといけないかもしれないけれど、この店にそんな無粋なものはない。

オフィスに出るようになったら同僚に会えるけど、お

局とも顔を合わせることになる。そう思っただけなら、同僚からお局が流行り病ながらオフィスに出向いたら、同僚からお局が流行り病で倒れたと知らされた。いい気味だと思ふ反面、身近なケースで少しびびった。

「お待たせいたしました、ハンブルグステーキとパンでございます」

厚手のミトンを手にはめた店員が、湯気の立つ丸鉄板に載せられた料理を運んできた。鍋敷きの上に料理が載せられる。

鉄板の上には熱でパンパンに膨らんだアルミホイルの包み、そして皮付きジャガイモが丸々一つにクレソンが添えられている。

テーブルの上の籠の中からナイフとフォークを取り出し、プレゼントの包みを開ける子どものようにわくわくしながら銀の包みに刃を入れる。アルミホイルはすんなりと割け、中から勢いよく湯気が立ち上る。そのまま割れ目を押し広げる。ビーフシチューの香りと共に、漏れ出たソースが鉄板に広がりじゅわあ、ぱちぱちと音を立てる。

アルミホイルの割れ目は大きな穴となり、中にはハンブルグステーキがでんと鎮座している。ハンバーグ、と言ってもいいのだがどこかそう言わせない特別感がある。ナイフとフォークをハンブルグステーキに差し込む。

空気を含んで柔らかく形成したステーキは下手に切り込むとぼろぼろと身崩れする。端っこから切り離したけど、やっぱり崩れてしまった。

ソースをたっぷりとつけて口に運ぶ。熱と共にビーフシチューの香りとコクが口いっぱい広がる。柔らかく組まれた肉の歯ざわり、しんなりと煮込まれた玉ねぎの食感。これこれ。このために今日を生きてきた。

優しい味わいに背中をそっと押されるようにして、私はまたナイフとフォークをハンブルグステーキに向かわせる。今後は大きく切り込み、頬張る。焼けるような熱さの肉汁が染み出す。飲み込むと胃の中が温まるのが分かる。

一度ここでナイフとフォークを置き、パンに手を伸ばす。カチカチのフランスパンだ。バリバリとちぎるとパンくずが皿だけでなくテーブルにも飛び散る。これがめんどくさくて家ではフランスパンを食べない。

バターナイフで付け合わせのバターをえぐり、パンに塗る。何の変哲もないパンであるはずなのに、焼けた小麦の深い香りに食欲がそえられる。

今度はクレソンに手を付ける。そのまま食べるとえぐみがきつそうだから、アルミホイルの包みの内側を拭うように緑色を走らせる。茶色が銀色と焦黒色に変わり、私はクレソンを口に運ぶ。意外に歯ごたえのある茎の食感と柔らかな葉の食感、鉄板に直に触れていないために生ぬるいような温度。きつとしたえぐみは無く、ソースと合わせていい箸休めになる。手にしているのは箸じゃないけれど。

またハンブルグステーキを切る。混ぜ物は無し、肉のみでガツリと焼き上げたはずなのにこの柔らかさ、食べやすさ。私も過去に自宅でハンバーグを作ってみたことがあるけれど、つなぎの玉ねぎを買い忘れて仕方なくひき肉のみで作ったところガチガチに固いハンバーグになってしまい、とてもじゃないけど食べられたものではなかった。

フォークで取り、また口に運ぶ。さすがに少しぬるくなってきたのはいるけれど、口の中で肉汁とビーフシチューの香りが爆ぜる。フォークとナイフから少し残った肉

汁がアルミホイルに滴り落ち、脂の丸い波紋が細かくつつき合う。

残り少なくなったハンブルグステーキを惜しむように残しておき、私は付け合わせのジャガイモソテーに手を伸ばす。肉そぼろの餡がかけられたそれは芯までホクホクと火通しされていて、ナイフを入れたそばからポロポロと崩れる。少しいらだった私はお行儀が悪いと知りながらも思い切ってフォークを突き立て、丸々一個のジャガイモソテーを真つ二つにし、その片方にかぶりついた。

塩気の効いたそぼろ餡によって、ジャガイモ本来の甘さとうまさが際立っている。ホクホクとした食感を口いっぱい楽しみなが、ちよつとずつ飲み込んでいく。口の中がほぼ空になり、水を一杯。芋料理は好きだけど水分が口内から吸い取られるのが時々疎ましく思われる時もある。でもこの水は口直した、最後に残ったハンブルグステーキを迎え入れるための幕間だ。少し気取ったようなゴブレット型のグラスを空けると、小さくなった氷がからからと音を立てた。びっしりと結露に覆われたピッチャーから水を注ぐ。

最後の主役には残ったソースをたっぷりとまぶそうかと思っただけれど、ソースはべに取っておこう。私の口には少し大きすぎるけれど、思い切つて頬張る。空腹が満たされつつあることや味に少し慣れてきたこともあって、さすがに最初に口に入れた時ほどの鮮烈さは失せている。でも、またこの店でこのハンブルグステーキを食べようと思わせるには十分すぎる余韻をもたらしてくれる。

半分ほど残ったジャガイモソテーにまたフォークを突き刺す。さつき食べた時には程よく焦げ目がついた皮がべろりとむけて逃げてしまった。今度は逃がさない、皮

ごと口に運ぶ。

さつきまでのホクホク一辺倒の食感とはまるで違う。粘り強いかみちぎられまいとする皮の柔らかくも突っ張った食感が楽しい。焦げ目のところを噛むと少しだけカリカリとした歯ごたえがある。ジャガイモソテーにここまで様々な食感があるというのを久しぶりに思い起こさせられる。前に驚かされたのは、そうだ、前にこの店でこの料理を食べた時だ。次にこの店で食事をするときは違うものを食べてみようと考えるのに、ついついいつもこのハンブルグステーキを頼んでしまう。

さて、残るはフランスパンだ。私はまた固いパンをちぎり、とりあえずはバターを塗る。瞬く間にフランスパンの残りは減っていき、バターが先に尽きてしまった。でも、これでいい。

最後はバターを塗らない。最後の一口に残しておいたパンをアルミホイルの銀色の中に投下する。指で満遍なく銀の底を拭い、やがて茶色は拭われなかった細かい線だけになった。アルミホイルの底には私が最初にナイフを入れた時にできた割れ目があり、そこから黒々とした鉄板と泡状のまま焦げ付いたビーフシチューソースが顔を覗かせていた。

パンの柔らかい白が残っていたビーフシチューソースの深い茶色に染まる。やっぱりやんはこうじゃなくつちや。ハンブルグステーキを頼むと、どうしても主役が肉になつてしまう。パンはソースだけを楽しむのに最後まで取っておく、それが私の食べ方だ。

赤ワインやスパイスも使っていないような風味はあるのに、それでいてこの優しく包み込むような味わい。ずっとこの味だところつりすぎているけれど、ハンブルグステーキとパンの組み合わせなら色付けるのにちょうど組

み合わせた。

最後にまた冷たい水で喉を潤し、完食。ごちそうさまでした。

伝票を持って階下に降りる。いつの間にか行列ができている。食べるのに夢中で気付かなかったけれど、私がいたフロアも満席になっていたのかもしれない。レジに向かうとバーコード決済ができるようになっていた。この店も少しずつ変わってきている。次こそは私も違うメニューを頼んでみようか？ でも結局はハンブルグステーキを頼んでしまう、そんな気がする。

「ごちそうさまでした」

「ありがとうございました、またお越しくくださいませ」

初老の店員が頭を下げ、愛想よく送り出してくれた。給料日直後だからこそそう痛くない金額を支払い、冷めやらぬハンブルグステーキの熱を胃に感じながら外に出る。帰りに品川駅のトイレで少し乱れた口紅を直しているのか、いやマスクをしていればばれやしないか、そんなことを考えながら私は店を後にする。午後の始業まではまだしばらく時間がある。

日差しの強さに思わず上を見上げる。『つばきグリル』の二階の窓からは、小さなジャック・オー・ランタンが笑いながら私を見下ろしていた。